暮らしづくりネットワーク北芝とは・・

活動地域・・大阪府箕面市萱野地域

＜箕面市＞
人口はおよそ13万人、大阪市内のベッドタウン。
関西圏では、芦屋市と並び富裕層の多い地域として認知されている。その一方、経済的に安定してることでひきこもりが長期化していたり、経済的困窮層が声をあげられず学校や地域で見えづらくなっているなどの地域特性がある。

＜萱野地域＞
126戸の公営団地、小中学校、幼・保育所が集中しているエリア。徒歩圏内に大型ショッピングモールがある。2020年には地下鉄の駅が延伸することが決まっており、土地の値段が上昇している。

＜粟生間谷エリア＞
総戸数2300戸のUR団地が立ち並ぶエリア。近隣は学生マンションが多いため、地方出身の若者も多数在住している。

暮らしづくりネットワーク北芝とは・・

＜事業ビジョン＞

　地域の課題を解決するための活動を起こそうとしている個人やグループの支援を行い、人と人、組織をつなぐネットワークとして機能することを目的として2001年に設立されました。

　「誰もが安心して暮らせるまちをつくりたい」という地域の人たちの思いを共有し、知恵を出し合う「暮らしづくり」の協働活動を進めています。

28年度社会福祉振興助成事業
「生活困窮に陥った若者主体の地域づくり」

地域連携活動支援事業

＜事業概要＞

生活困窮状態にあって生きづらさを抱える若者が力を発揮し、
「社会的居場所あおぞら」を活用し、地域福祉拠点の定着を目指す事業。

＜事業内容＞

・社会的居場所「あおぞら」の運営
・若者支援施策のありかた研究会（「見えにくい生きづらさ」学習会）
・当事者研究「ヒバ子の集い」
・地域のフードバンク構築プロジェクト

KURASHIZUKURI Network KITASHIBA

事業実施にあたり工夫した点

・スタッフだけで事業を進めない

⇒当事者や関係機関が参画できる余地を残した。手間がかかるし、
イレギュラーな出来事も起きるが、事業展開に必要なプロセスで、
関係者と協働したことで、助成終了後の事業継続にもつながった。

・会計は複数で管理する。

⇒会計処理が複雑なので、ダブルチェックの徹底が必須。
事業スタート時に管理方法と明確な役割分担を確認しておいた。

・目の前のニーズに柔軟に対応。

⇒計画立案時から状況が変わることも。
（ex対象者のモチベーションの変化、地域の状況の変化など）
計画にとらわれすぎず、変更が必要な状況であれば
協議しながら柔軟に対応した。

KURASHIZUKURI Network KITASHIBA

事業計画立案について

立案のポイント（北芝流）

●マクロの視点
→社会を変えたいという強い思い、そのための具体的な道筋がイメージできているか。
→制度、社会情勢、仕組み、時代の風等、俯瞰した視点での社会への理解。
●ミクロの視点
→目の前の当事者から見えるニーズ。
→ひとつの事例を通して見えるストーリー。そのストーリーが、周囲の心を動かし巻き込む力を生むことも。
※マクロとミクロの視点のバランス。どちらかに偏ると説得力が弱まる。

●事業に取り組む目的、意義が明確かどうか。
→内部での目的・意義、対象者、地域、社会にとっての目的・意義が明確になっているかどうか。
　また、それぞれが共有できているか。

●助成がなくなったときに継続できるかどうか。
→助成期間中に終了後を見越して、継続するための仕組みをつくっておく。
　その方法は財源を確保するだけじゃなく、仲間を増やす、既存の資源を活用することも含まれる。

●自分たちにしか分からない「言語」になっていないか。
→熱意があればあるほど、自分たちにしかわからない内容になりがち。
　他団体の人や、違う業界の人が読んで（話を聞いて）理解できるか。
　（身近な人や他団体の仲間などに要望書をチェックしてもらうと効果的）

KURASHIZUKURI Network KITASHIBA

成果をあげるために工夫したポイント

・孤独にならない

⇒自分たちの組織だけ、担当者だけで完結しない。
対象者、関係者をプロセスに巻き込む。
特に、楽しいことは一緒に体験することで、協働するおもしろさを実感してもらう。その結果、継続した関係性のきっかけになる。

・本来の目的を見失わない。

⇒当初の計画から外れないことが目的になりがち。
「だれのために」「なんのために」を、その都度確認する。

・こまめに協議、相談

⇒組織内、連携団体とのこまめな協議だけでなく、状況が変わったらすぐ対応できるように事前にWAMの担当の方への相談も忘れずに。

KURASHIZUKURI Network KITASHIBA